

心敬名所の句私抄

心敬の一座した百韻のうち制作年のわかるものを対象とし、このうち心敬の名所を詠み込んだ句を抜き出して注釈を施してみた。

独吟および千句ならびに制作年未詳の百韻は、今回はとらなかつた。機会を見て、別にとりあげたい。

注釈の手順は、はじめに大意を、つぎに付合の解説、おわりに名所を詠じた意義、その他諸種の問題についてとした。

連歌本文は横山重編『心敬作品集』へ貴重古典籍叢刊5』による。ただし、読みやすいように、送り仮名を施し、仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一し、まゝ、漢字を仮名にかえた。作者名は心恵は心敬とし、一字で示されている名は、判明するかぎり全名を記した。

文安四年五月二十九日 何船百韻。親当、宗砌、能阿、忍誓、心敬ら。発句は「川の瀬のこゑは井せきの水鶏かな 親当」。名所の句は十二句。心敬の句は八句、うち名所の句は一句。

岡 本 彦 一

二才3 霜のふるまがひに露や消えぬらん 忍誓

4 はま風さむしすみの江の月 心敬

「空には霜がはげしく降り乱れている。それによって地上の草木に置いた露は消えてしまおうか」の意の前句に、「住吉の浜には浜風が寒く吹く。空には月が寒さむと出ている」と付けた。

付合、「霜」に「寒・月」は寄合（連珠合璧集）以下省略。単にこの寄合にたよって付けたほか、前句に「寒さ」を見出して付けている。また前句の情景の場所を打越の句に「野辺・山本」とあるから海辺を設定したと見られる。

名所、「住吉」を出した意義はただ海辺を出したいからというのでは薄弱である。『擊蒙抄』には「名所連歌は第一大事也」とあり、『連理秘抄』には「名所など努く無用の時出すべからず」とあり、また『九州問答』には「前句に名所寄所ナカラズルニ、平々ト吉野龍田ヲセン事、アルマジキ也」とある。しかしながら、「すみの江の月」と「住吉」に「月」をそえたところで救われて

いる。『吾妻問答』には「又、名所の句をする時、其の名所の寄
せ候はでは悪しく候」と見える。また『随葉集』には「住吉に
は」として「月」が見える。住吉と月の例歌少々、千載、俊恵
「すみよしのまつゆきあひのひまよりも月さえぬれば霜はおき
けり」、千載、藤原実定「ふりにける松ものいはばとひてましむ
かしもかくやすみのえの月」。

この「川の瀬の」の百韻に名所の句が十二句見える。この数字
は他の百韻とくらべて圧倒的に多い。ちなみに本稿で用いた百韻
十三における名所の句の平均は八句、宗朝主導の四巻、忍誓主導
の一巻、計五巻の平均は十一・八句、心敬主導の七巻、能阿主導
の一巻、計八巻の平均は五・六句となる。宗朝主導の百韻に名所
の句が多いのは、『吾妻問答』に「宗朝は名所を多くつかふま
つるにや」と見えることばの裏付けとなる。

文安四年八月十九日 何人百韻。親当、心敬、忍誓、専順ら。
発句は「名もしらぬ小草花咲く川辺かな 親当」。名所の句は八
句。心敬の句は十九句、うち名所の句は二句。

二ウ7 泊りなき船路を月にとだ馴れて 忍誓

8 今のうき寝も猶明石瀉 心敬

「停泊することのない船路で、毎夜見る月に馴れた」の意の前
句に、「今夜明石瀉に船をとめて船中で寝ているが、明かしがた
いという名のように夜を明かしがたくしている」と付けた。

付合、「月」に「明石」を寄せ、「泊りなき船路」に対して「う

文安四年九月六日 山何百韻。忍誓、智蘊、心敬、宗朝、専
順ら。発句は「秋の色我が葉にかへる梢かな 忍誓」。名所の句は十
二句、うち宗朝の句は六句と圧倒的に多い。心敬の句は十二句、
うち名所の句はない。

文安四年十月十八日 朝何百韻。宗朝、親当、忍誓、心敬、専
順ら。発句は「欄葉に咲くや八たびの霜の花 宗朝」。名所の句
は十七句、うち宗朝の句は五句と多い。心敬の句は十一句、うち
名所の句は一句。この百韻、高野山大学本には「文安二年」、国
会図書館本には「文安四年」とある。いま金子金治郎氏の説によ
り「文安四年」にしたがう。

二ウ2 たえて猶とるすまの山しば 聖阿

3 五月雨をうらのしほ屋の薄煙 心敬

「須磨の山の柴木は取りつくしたのに、それでもなおそれを取
って生活の資にせねばならぬ」の意の前句に、「五月雨も仕事の
邪魔になるものとうらめしく思いながら、塩屋の浦の塩屋では海
士が塩を焼いていて、その薄煙がたちのぼっている。それはわび
しい生活に耐えて、山柴を取ってそれを焚いているのだ」と付け
た。

付合、「塩やき」に「須磨」は寄合。前句の状況を海士の塩焼
く生活に移した付合。

名所、「須磨」に同国の「塩屋」を付け、地名のほかに、塩焼

き寝(停泊)を付けた。

名所、「明石瀉」は「月」を寄り所とした。「船路」も「明石瀉」
に縁を持つ。また、「あかし難」と掛詞として用いている。『連理
秘抄』にいう「当世常に隠してする一の体也」にあたる。月と明
石と船の例歌少々、金葉、藤原実光「月影のさすにまかせて行く
船は明石の浦や泊りなるらん」、純古、藤原俊成「船とむる明石
の月の有明けに浦より遠のさを鹿の声」。

三オ7 入江なる尾花が本の朝氷り 親当

8 初雪しろし真野の冬かれ 心敬

「入江にある尾花の根本には朝の氷がはっている」の意の前句
に、「真野の入江は尾花も冬枯れてしまつて、根本には朝氷が見
渡される。その上に初雪が白く置いている」と付けた。

付合、「尾花」と「真野の入江」は寄合。金葉、源俊頼「うづ
らなく真野の入江の浜風に尾花浪よる秋の夕ぐれ」による。寄合
のほか「朝氷」に「初雪」と付く。新千、永福門院「解けやらぬ
池のみぎはの朝氷こほれる程につもる雪かな」。また前句の情景
のすべてが生かされて、新しい場面を現出した付合となっている。
和歌に寄せをもつ、心敬らしい発想による美しい風景。

名所、「真野」は前句の「入江」・「尾花」により絶対的な付合
となる。『九州問答』にいう「前句ニトリ寄所又本歌寄合アラン
時名所ヲセラルベキ事也」にあたる。

この百韻、宗朝の出座はない。親当が主導と思われる。

き小屋の意を持たせている。ここで問題は「塩屋」である。千載、
藤原公教「思ふことくみてかなふる神なればしほやにあとをたる
るなりけり」があり、詞書に「白河法皇くまのへまらせ給うけ
る御ともにてしほやの王子の御まへにて人人歌よみ侍りけるに
よみ侍りける」とある。この歌「歌枕名寄」にも紀伊国塩屋浦とし
て出ている。心敬の句の塩屋を紀伊国とする、前句が「須磨」
であるので、国を隔てた名所を付ける場合には特別な用意が必要
となる。それは「対して付ける」・「通所」があるということ、
この場合はどうであろうか。「うらのしほ屋」を「塩屋の浦」の
倒置と見て、「五月雨をうらむ」の掛詞としての用法と見れば、
一句としては名所を出す用意は出来ているといえる。ただ名所に
名所を付けた場合の「通う所がある」と見ることが出来るであろ
うか。さいわいな事に『能因歌枕』には「播磨国」に「しほや」と
見える。「きのくに」には見えず。現在も須磨・塩屋・垂水・舞
子・明石と海岸ぞいに地名がある。こうなれば「近き辺の名所」
で用意は十分。筆者としては「能因歌枕」を生かしたい。

享徳二年三月十五日 何路百韻。宗朝、忍誓、行助、専順、心
敬、元長。発句は「さく藤のうら葉は浪の玉藻哉 宗朝」。名所
の句は十句、心敬の句は十九句、うち名所の句は二句。

二ウ6 うたふや木陰梅がえの声 忍誓

7 友さそふ難波の舟子さほとりて 心敬

「木陰で催馬楽の「梅が枝」をうたっている。その声が増えて

くるよ」の意の前句に、「難波の海で舟子は棹を取って友舟を誘うかのように舟うたをうたっている」と付けた。

付合、「梅」に「難波」は寄合（連歌付合の事）。意味の上では前句「うたふや」を生かし、「かけてには」の如く、前句にかえってゆく付合となる。「木陰」以下は捨てた。

名所、「難波」は前句「梅」の寄合で出した。古今序に見える「難波津にさくやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」の「この花」を梅と解することにより「梅」に「難波」は寄合となる。

三才9 ここをさる程をさかひの後の世に 宗朝

10 明けていづみの袖のかりぶし 心敬

「後の世においては、ここを去る時をこの世とあの世の境にすることである」の意の前句に、「夜があけて、外へ出て見ると、旅の仮寝をしたところは、和泉の国の袖山であった」と付けた。

付合、前句の「さかひ」を「和泉国堺の浦」に、「後の世」を「つぎの夜」ととりなし、「堺の浦」には「和泉の袖・夜」には「明けて」と付けた。心敬のときにやる「とりなし付け」である。

名所、「和泉の袖」は万葉、作者未詳「宮材引く泉の袖に立つ民の息む時も無く恋ひわたるかも」が本で、うたいつがれている。山城国泉川（木津川）に沿った地とされているが、『八雲御抄』には和泉国とし、以来両様に解されている。「堺の浦」については、新撰和歌六帖、藤原為家「行く春のさかひのうらのさくら鯛あか

いう記号は、かりに末尾四句欠としての順番で付けたものである。

三ウ11 鳥かげにかかるうら船梶をたえ 賢盛

12 あはぢのせとにあるるしら波 心敬

「鳥かげでは浦船が停泊し揖をやすめている」の意の前句に、「一方、淡路の瀬戸では海が荒れて白波を立てている」と付けた。「梶をたえ」は種々の解があるが、ここでは「揖を使用することをやめ」の意に解した。

付合、「鳥かげ」を「淡路」を定めた付合。鳥かげのおだやかさに対して、瀬戸のはげしさを付けた。

名所、「淡路の瀬戸」は前句の「鳥かげ」を「淡路」と定めたことによるか。前句の「梶をたえ」は新古、曾禰好忠「由良の門をわたる舟人かちを絶え行方も知らぬ恋の道かな」によるものであるから、この「梶をたえ」に「由良の戸」を見出し、これに寄せて「淡路の瀬戸」を付けた。前句に名所としては示されていないものの、これを縁としたのである。この由良を紀州の由良と解した場合、紀伊と淡路とは国は違うが、対岸であって、『連歌教訓』にいう「名所に名所を付るは近き辺の名所然るべし」、あるいは「対して付る」、又は『当風連歌秘事』にいう「通所」のある場合と見ることができよう。好忠の「由良の門」は『八代集抄』に「玄旨云、由良門は紀伊国也」とあり、丹後の由良説が契沖の『百人一首改観抄』によるものであるならば、心敬も紀州と解していたものと見て大過はなからう。

名才6 ながき日おしむ木がくれのみち 行助

心敬名所の句私抄

ぬかたみに今や引くらん」が『夫木和歌抄』にも見え、これには「さかひのうら、和泉又紀伊」とある。万葉、作者未詳「木国の狭日、鹿の浦に出で見れば海人のともし火浪の間ゆ見ゆ」が本で、夫木和歌抄、頼平法師「紀の海のさひかの浦のおきつもの春の日ぐらしかづくあま」と見え、また夫木和歌抄、権律師頼尋「きのうみのさかひのうらのおきつもをはるのひくらしかづくあま」とも見える。この二首ともに『現存和歌六帖』と出典が記されているが、『新撰国歌大観』のそれには見えない。それはそれとして、こうした経路をたどって「狭日鹿」が「さかひ」となったものと思える。「狭日鹿の浦」は現在の和歌浦から続いた「雑賀崎」とされている。前記為家の「行く春のさかひのうら」は和泉と見てよいのではないか。心敬が三才9の「さかひ」を「和泉国の堺の浦」ととりなし、これに「和泉の袖」をつけたとの傍証にならうか。

寛正二年正月二十五日 何路百韻。頼久、心敬、行助、有伯、士沱ら。発句は「声ぞ花木伝ひつくせ百千鳥 頼久」。名所の句は七句。心敬の句は十句、名所の句はなし。

寛正三年二月二十七日 何人百韻。行助、心敬、賢盛、専順ら。発句は「けふこずは見ましや宿の花盛り 行助」。名所の句は五句。心敬の句は十四句、うち名所の句は二句。この百韻四句欠けている。どこで欠けたものか判然しないので、何の折、何句目と

7 橋立やうら葉はるけき松を見て 心敬

「春の永い日の暮れてゆくのを木がくれの道でおしむことだ」の意の前句に、「入海にずっと遠く続いている松を見てここが天の橋立だなあと思う」と付けた。

付合、「木がくれのみち」を「橋立の松の下道」と見立て、「ながき日」に「うらははるけき」を配した付け。

名所、「橋立」は前句全体の情景に寄せた。参考歌。新拾、前大僧正孝覚「よきの浦入海かけてみわたせば松原とはきあまのはしだて」、堀川百首、紀伊「船とめてみれどもあかず松風に浪よせかへるあまのはしだて」。

「うら葉」と「松」は、万葉、作者未詳「池の辺の松之末葉にふる雪はいほへ降りしけあすさへも見む」、堀川百首、源国信「打ちなびく風のけしきはのどけきに松のうらばにかかる藤波」の用例があるが、この句ではあまりしっくりしない。したがって「浦は」で解した。「浦廻」とすると「うらわ」となる。

寛正四年六月二十三日 唐何百韻。道賢、勝元、心敬、行助、専順ら。発句は「蟬のはの衣おりたつ泉かな 道賢」。名所の句は五句。心敬の句は十四句、うち名所の句は一句。

三ウ13 おもふ事なくてや月にむかふらん 勝元

14 秋にもあかぬあまの橋たて 心敬

「思うことなくて月に対しているのだらうか」の意の前句に、「天の橋立の風光は四季それぞれの趣きがあるが、秋の風光とし

てはここで月を眺めるのは、まことに思うことなく月に対しているかのようであって、厭こうにも厭かぬ眺めである」と付けた。付合、千載、赤染衛門「思ふことなくてや見まじよきの海の天の橋立都なりせば」によって、前句の「おもふことなくてや」に「天の橋立」を付け、前句で秋季がはじまったので、秋季を続けるため「秋にも」を付けた。「秋」には「厭き」をかけ、「厭こう」としても厭きない」の意を持たせた。

寛正五年十二月九日 何路百韻。勝元、元説、能阿、心敬、専順ら。発句は「一年に遅き花かな冬の梅 勝元」。名所の句は六句。心敬の句は十七句、うち名所の句一句。

名オ8 神もやいますこや朝日寺

常安

9 なるかねの声の内野は暮れ初めて 心敬
「神もいらっしやるのであろうか、これは尊い朝日寺であるよ」の意の前句に、「その朝日寺から鐘の音が響いてくる。その鐘の音の内、ここ内野は日も暮れ初めてきた」と付けた。付合、「寺」に「鐘」「野」は寄合。北野の「朝日寺」に程遠くない「内野」を付けた。

名所、「内野」は「朝日寺」のある北野と遠くない。また「内野」は「声の内」と掛詞として用いている。「連理秘抄」にいう「当世常に隠してする一の体也」にあたる。

る浪の音のさやけさ、古今、凡河内躬恒「すみの江の松を秋風ふくからに声うちそふるおきつ白波」へ内侍のかみの右大将藤原の朝臣の四十の賀しける時に、四季の絵かけるうしろの屏風にかきたりけるうた、玉葉、藤原為子「浦遠くならべる松の木のみより夕日うつれる波の遠かた」へ住吉にまうで侍りけるに浪にうつれる入日の影いとおもしろく見えければ。和歌では「西日」ではなく、「入日」・「夕日」である。

名オ7 衣うつ音は聞けども主しらす

大況

8 袖のうらにはよする夕浪

心敬

「衣うつ音は聞こえるが、一体どんな人が打っているのか、その人は知られない」の意の前句に、「きぬたの音を聞くと何かなしに哀愁を覚え、まるで袖の裏には夕浪が打ち寄せるかのように涙でぬれたことである」と付けた。

付合、「衣うつ音」の哀愁に「袖の涙」を付けた。

名所、「袖の浦」は「涙でぬれる袖の裏」をかけて用いた。拾遺、よみ人しらす「君恋ふる涙のかかる袖のうらは岩はなりとも朽ちぞしぬべき」、新勅撰、藤原道家「うしと思ふ物からぬるる袖のうら左みぎにも浪や立つらん」などと恋に詠まれ、「浦」に「裏」をかけ、「浪」・「涙」・「ぬる」などの縁語を用いることが多い。前出「隠してする一の体也」にあたる。

寛正六年十二月十四日 何船百韻。勝元、賢盛、心敬、専順、行助、宗祇ら。発句は「鳥ねふる床はこほりて浪もなし 勝元」。

寛正六年正月十六日 何人百韻。心敬、行助、専順、宗祇ら。発句は「梅送る風は匂ひのあるじかな 心敬」。名所の句は七句。心敬の句は十六句、うち名所の句は三句。

二オ10 みなとを深み浪ぞあれぬる

幸綱

11 五月雨をみつ汐なれや比良の海 心敬
「みなとが深いので浪が荒れたことだ」の意の前句に、「折からの五月雨で湖は増水して、ここが海ならば満潮であるかのよう」に、ひらたく一面に広がっている。この比良のうみは山風に浪は荒れているというのに」と付けた。

付合、「みなとを深み」は捨て、「浪ぞあれぬる」に「比良の山風」を連想、その「比良」に「ひら(平)」をかけ、前句とは逆の静穏な景を付けた。

名所、「比良の海」は「ひら(平)」との掛詞として用いている。前出「隠してする一の体也」にあたる。

三オ6 みぎはの松は浪にうかべる

大況

7 住よしやのこる西日は香にて

心敬

「水際の松は浪の上に浮んでいる」の意の前句に、「海上はるかに入り残る夕陽の美しいこの住吉では海岸の松が波に浮んで見える」と付けた。

付合、「住吉」に「松」は寄合(連歌寄合の事)。

名所、「住吉」の寄合は「松」との寄合による。住吉と松と波の歌三首。万葉、作者未詳「住吉の岸の松が根うちさらし寄り来

名所の句は三句。心敬の句は十三句、うち名所の句はなし。

寛正七年二月四日 何人百韻。心敬、行助、専順、宗祇ら。発句は「ころやとき花に東の種もがな 心敬」。名所の句は五句。心敬の句は十一句、うち名所の句はなし。

応仁二年冬 何人百韻。心敬、宗祇、修茂、覚阿、長敏ら。発

句は「雪の折るかやが末野は道もなし 心敬」。名所の句は七句。心敬の句は十九句、うち名所の句は一句。この百韻の制作年次は伝本に記載されていない。発句が『芝草句内発句』の後半「吾妻下向発句草」に収載され、この部分は制作順に記されている。それによって推定すると、応仁二年の冬の作となる。

三オ1 千年ともいひしやいつの塚の松 宗祇

2 心のびける船岡の春

心敬

「塚には松が生えている。この塚を築いたのはいつの事であつたらうか、千年を期して築いたものであろうか」の意の前句に、「船岡山で松の千年を祝って、子の日に小松を引いたことがあった。あれは過ぎ去った日のことであったが、いま心のびやかに船岡の春にひたっている」と付けた。

付合、「塚」に「船岡」を付けた。「塚に舟岡ハ付べし」(産衣)。意味の上では「塚」は捨てた。玉葉、西行「船岡のすそ野の塚の数へてむかしの人に君をなしつる」がある。

名所、「船岡」のよせも「塚」である。「心のひける」は金子金

治郎「心敬の生活と作品」所収の「応仁二年冬心敬等何人百韻注」は野坂本の本文をとって「ところそひける」で解釈してある。ここは天満宮文庫本で解を加えたが、「心の引ける」とも「心伸びける」とも読め、どちらも解釈は成り立つ。ここでは「心伸びける」と解した。万葉、作者未詳「春の野に心伸べむと思ふどち来し今日の日は暮れずもあらぬか」がある。「千とせ」、「松」、「船岡」の歌には経信集「子の日してよはひをのぶる船岡は松のちとせをつめばなりけり」がある。

心敬の参加している十三の百韻を対象として、心敬の名所の句に注釈を加えてきた。ここでいささかのまとめを記しておきたい。

対象の百韻十三のうち分けは、宗砌が主導しているもの四、親当のそれ一、心敬のそれ七、能阿のそれ一となる。宗砌・親当主導の百韻五における名所の句は五九句、平均一一・八句、心敬・能阿主導の百韻八における名所の句は四五句、平均五・六句となる。対象の百韻一三における名所の句は一〇四句、平均八句となる。全体の平均はさておき、宗砌・親当主導の場合と心敬・能阿主導のそれとは截然たる差がある。しかも親当主導の「名も知らぬ」の百韻における名所の句は八句であって、これが全体の平均と同じであるところが妙である。「吾妻問答」において「宗砌は名所を多くつかふまつるにや、当奉行能阿も好み侍る也、是（筆者注。宗祇）はたゞ好むと侍らねども、事を広く覚えて侍るまゝに、似合ひたる事には取出だして、おのづから付くる事也」と

答えている。この宗砌は云々はここに数字となってあらわれている。

心敬はこの十三の百韻において、「秋の色」、「声ぞ花」、「鳥ねふる」、「ころやとき」の四つの百韻には名所の句を吟じていない。それぞれの百韻における心敬の出句数は十句以上であるから、名所の句一句ずつはあってもよい数であった。しかも、宗砌・親当主導の場合は「秋の色」の一例、心敬・能阿主導の場合は他の三例となる。前者での割合は $\frac{1}{4}$ 、後者でのそれは $\frac{3}{4}$ となる。野球でいえば二割の弱打者と三割七分五厘の強打者との差となる。つまり前者の場合心敬はつとめて他の連衆にあわせていたが、後者の場合は自由に吟じたという情況が濃厚となる。

心敬が名所の句を吟じた場合、たいてい百韻中、一、二句であるが、「梅送る」は三句である。そして心敬が三句吟じたのはこの百韻だけであり、かつこの百韻の名所の句は七句と多い。この百韻は連衆十名のうち、七名までは熊野千句の連衆で、あと三名のうち一名は執筆と思われるので、いきの合った、そして力量に大差のない連衆での気楽な会ではなかったかと思われる。「雪の折る」は名所の句七句、心敬の名所の句は一句、しかし宗祇が三句と多い。この百韻は関東に下った心敬が、やはり当地に下っていた宗祇と相会し、のびのび吟詠をするともに、鈴木長敏、大胡修茂らを相手に、指導的な意味をも持った百韻と思われるのである。「声ぞ花」は七句の名所の句があるが、その付合は荒い感じが強い。出句数と名所の句との均衡もとれていない。出句数十

の心敬、九の宗江、顕乗の三名には名所の句はない。この百韻の発句は頼久、この人については金子金治郎『心敬の生活と作品』によれば「発句の頼久は、細川阿波守基之（備中守護満之男）の子、阿波守頼久（分脈）であろう」とある。連衆は十七名と比較的多数。北野天満宮法衆としての興行。宗砌・親当主導の時代の「名も知らぬ」は中心人物は親当、心敬、専順、忍誓、孝の五名、そのうち専順は初折、二折に句が見えるだけであるから、三折以降は中座したと見られる。つまり有力吟者は四名となる。「さく藤の」は宗砌、忍誓、行助、専順、心敬の五吟である。そういう関係で心敬はこの二つの百韻の名所の句各二句宛吟じたものと思われる。これには他者との釣り合いをとるといふ意識もあったのではなからうか。ともあれ、心敬は名所の句についてはあまり熱心ではなかったようである。

名所の句の数字を千句について当ってみたい。

心敬の連歌歴において「享徳千句」、「熊野千句」、「河越千句」はその節目にあたる。

「享徳千句」は宗砌主導の時代、享徳二年八月興行である。翌三年十一月には宗砌は会所奉行を辞し、但馬に退去している。従って宗砌時代の終りを告げる千句と見てよい。名所の句一〇七句、うち心敬の句八句、ちなみに主要作者の名所の句と出句数は、宗砌三六／一六五、忍誓一四／一三一、心敬八／一一五、専順八／一〇六、賢盛八／一〇五、之基二三／九八、日晟一二／八三となる。この数字、宗砌は別格であるが、心敬、賢盛、専順はほどは

どになっっている。「熊野千句」は細川勝元を中心に、心敬の連歌の高揚時代、金子金治郎『心敬の生活と作品』によれば、寛正五年春興行となる。となると寛正二年から寛正六年、文正元年と多くの連歌作品を、その主導者として残している心敬の活動期のまった中の作。名所の句七五句、うち心敬の句一三句。ちなみに主要作者の名所の句と出句は、心敬一三／一〇九、専順一一／一〇四、行助三／九三、勝元四／九一、道賢六／七七、宗祇一／七五、常安八／六七、盛長八／六六となる。心敬、専順が多いのは、その立場からいって当然である。それにしても、百韻にしてみれば一句そこそこである。「河越千句」は心敬の東国在任時代、文明二年正月の興行である。心敬の最後の千句であり、かつ、これ以後百韻の作も伝わっていない。専ら連歌論、注釈の活動をし、また和歌の世界での活動もある。ともあれ、内容上からも宗祇を相手に、東国の好士とともに心敬の到達点を示した作となった。名所の句は六四句、うち心敬の句二〇句。ちなみに主要作者の名所の句と出句数は、心敬二〇／一五六、宗祇九／一二八、道真七／一一〇、長敏八／一〇〇、中雅四／八三、修茂二／八一となる。さすがに心敬と他の作者との間に力量の格差があったからであろうか、出句も名所の句も、そしてその比率も圧倒的に多い。しかしながら名所の句は百韻にしてみれば二句ずつということではある。これを要するに心敬の名所の句に対する態度は抑制したものとなっていたといえる。

注① 名所連歌は第一大事也、何にも句の中に心を入れて、名所に作なすべき也。ただ紅葉にたつ、花に吉野とは付べからず、名所の句を作りおほする事、当世すべて其人なし、〔撃蒙抄〕へ岩波文庫 連歌論集 上〕

② 名所、殊なる用なき時、努々いだすべからず、当世常に隠してする一の体也、仮令河の名のいくたび、此山のをのれ、下草のおいその森、風の音志賀の山などいふ様の事也、真実名所ならで付まじき事あらんには、たゞもすべし、又肝要の時は、耳遠き名所をもすべし、詮なき名所ゆめ／＼停止すべし、〔連理秘抄〕へ岩波文庫 連歌論集 上〕

③ 連歌ニ、サシタル寄合ニテモナキ時、名所ヲシ候ハン事、如何候ベキヤ、答云、名所ヲスルトハ歌ニハ変リ侍ル也、花ノ題ヲ取テ吉野ヲヨミ、紅葉ノ題ヲ取テ龍田ヲヨマン事、歌ニハ定レル事也、連歌ハ、前句ニ名所寄所ナカランズルニ、平々ト吉野龍田ヲセン事、アルマジキ也、前句ニトリ寄所又本歌寄合アラン時、名所ヲセラルベキ也、又只名所ヲセン時ハ、言葉興有テスヘタリナンドシテスルハ一ノ体也、〔九州問答〕へ岩波文庫 連歌論集 上〕

④ 宗砌は名所を多くつかふまづるにや。当奉行能阿も好み侍る也。是はただ好むと侍らねども、事を広く覚えて侍るまづ、似合ひたる事には取り出だして、おのづから付くる事也。又、名所の句をする時、其の名所の寄せ候はでは悪しく候。一句に詮なき事など侍るは見苦しく候。たとへば、吉野には花・雪などをそへ、立田には紅葉・鹿などをいひ、弓根が嶺には雲をそへ、浅間山には煙をそへなどする事なり。〔吾妻問答〕へ日本古典文学大系66 連歌論集併論集〕

⑤ 国を隔たる名所と名所を付事、如何、答云、国を隔たる名所、歌

に読たればとて通所もなく、一句のなりもなく仕侍る事不可叶と砌公も申さるゝと也、〔当風連歌秘事〕へ岩波文庫 連歌論集 下〕
又名所に名所を付るは近き辺の名所然るべし、但対して付る時は国をへだてたる名所も苦しからざるなり、〔連歌教訓〕へ岩波文庫 連歌論集 下〕

⑥ おそらく二と四の間に誤写関係があると思うが、四の草体から二へのケースはありえても、その反対は考えられないので、四が正しいと思う。〔金子金治郎』連歌併論集』連歌編』へ日本古典文学全集 32〕

⑦ 「川の瀬の」主導 宗砌

- 初ウ2 さび江(普通名詞扱)
- 初ウ7 宗砌 布留野一吉野(掛詞)
- 初ウ13 親当 毘野一來や(掛詞、前句「池」によせる。
- 二オ4 心敬 住江一月」によせる。
- 二オ8 野路(普通名詞扱)
- 二ウ4 親当 葛城一前句「一夜」・「契」につく。
- 二ウ9 忍誓 淀野一前句「河」・「舟」につく。
- 三オ2 忍誓 箕面浦一前句「滝もなし」につく。
- 三オ3 羽 三島一前句「箕面」同園。
- 三オ13 忍誓 見室川(御笠)一前句「榊」につく。
- 三オ14 宗砌 宇治の橋本一前句「見室川」ともに造語。
- 名オ6 能阿 足柄一前句「八重山」につく。
- 名オ12 忍誓 高安一山の高安(掛詞、前句「河内女」につく。
- 名ウ5 天の川(普通名詞扱)
- 名ウ6 親当 交野一前句「天の川」同地。

宗砌2/17、親当3/12、心敬1/8、忍誓4/10、羽1/9、能阿1/9、専順0/9 (主要作者の名所の句と出句数)

⑧ 「名も知らぬ」主導 親当

- 二オ2 親当 生田一前句「求塚」の故事によせる。
- 二ウ8 心敬 明石瀉一前句「月」によせる。
- 二ウ13 述 春日野一前句「藤」によせる。
- 二ウ14 親当 佐保山一前句「春日野」同園。
- 三オ8 心敬 真野一前句「尾花」寄合。
- 三オ9 忍誓 横河一前句「真野」同園。
- 三ウ2 忍誓 十市一前句「一むら」によせる。
- 三ウ3 孝 葛城一前句「十市」同園。
- 親当2/19、心敬2/14、述1/7、忍誓2/16、孝1/15、専順0/6

⑨ 「秋の色」主導 宗砌

- 初ウ11 専順 淀継橋一前句「高瀬」・「川船」によせる。
- 二オ6 親当 阿波提森一會はで(掛詞)。
- 二オ12 宗砌 竜田路一前句「秋」・「色」によせる。
- 二オ13 専順 豊浦一前句「竜田」同園。
- 二ウ7 宗砌 宇治よせ未詳。
- 三オ1 宗砌 霞の関一うす霞(掛詞)。
- 三オ8 忍誓 石田小野一前句「柞」寄合。
- 三オ9 宗砌 井手玉川一前句「石田小野」同園。
- 三ウ2 日晨 住吉よせ未詳。
- 名オ1 忍誓 塩籠の浦一前句「霞」によせる。
- 名オ2 宗砌 松島一前句「塩籠の浦」同園、友待つ(掛詞)。

名ウ1 宗砌 更級一前句「月」によせる。今さら(掛詞)。
宗砌6/16、親当1/15、忍誓2/13、専順2/8、日晨1/8、心敬0/12、之好0/10

⑩ 「榊葉に」主導 宗砌

- 初ウ6 宗砌 星崎一前句「あかつき」によせたか。
- 初ウ7 親当 鳴海一前句「星崎」同園、寒くなる(掛詞)。
- 二オ2 宗砌 由良の戸一外山(掛詞)。
- 二オ3 原阿 白鳥関一紀関一「由良の戸」同園。
- 二オ9 宗砌 泊瀬山一前句「寺」・「鐘」寄合。
- 二ウ2 聖阿 須磨一前句「山柴」によせる。
- 二ウ3 心敬 塩屋一前句「須磨」同園。
- 二ウ9 宗砌 賀茂斎院一前句「萱(御所)」によせる。
- 二ウ10 親当 雲の林一前句「賀茂斎院」によせる。
- 三オ2 原秀 明石瀉一前句「る中の民」によせる、いつ明し(掛詞)。
- 三オ7 忍誓 美豆野一前句「妹がり」によせる。
- 三オ11 専順 (あづまぢの)夜(中山)一前句「なか」によせる。
- 三ウ3 宗砌 丹生一前句「杣木」によせる。
- 三ウ4 専順 吉野の滝一前句「丹生」同園。
- 三ウ12 忍誓 鳥羽(今里)一前句「霞しく・松枝・鶴」によせる。
- 名オ8 定康 交野一前句「雉」寄合。
- 名オ9 忍誓 楠葉の宮一前句「交野」同園、誰かく(来)(掛詞)。
- 宗砌5/16、親当2/14、忍3/13、心敬1/11、専順2/11、原阿1/7、原秀1/4、聖阿1/3、定康1/2

- ⑪ 「さく藤の」主導 宗砌
初ウ13 忍誓 野上の里―前句「君」によせる。
初ウ14 専順 不破―前句「野上」同園。
二オ8 小野 (普通名詞扱)
二オ12 雲の林 (普通名詞扱)
二ウ7 心敬 難波―前句「梅」寄合。
二ウ8 宗砌 田蓑の島―前句「難波」同園。
三オ2 宗砌 宇度浜―前句「うき」に「うと(疎く)」とよせる。
三オ10 心敬 和泉杵―前句「さかひ」を「堺」・「堺の浦」と解し、同園としてよせる。
三ウ11 忍誓 石見瀉・高津浦―前句「歌の道」によせる。名のみ高(掛詞)。
名オ2 専順 安部野―前句「人の群りて」に「安部野の市」をよせる。
名オ3 宗砌 浅香瀉―前句「安部野」同園。
名オ9 専順 鳴海里―出でがてになる(掛詞)。
宗砌3/25、忍誓2/20、心敬2/19、専順3/19、行助0/16、
⑫ 「声ぞ花」主導 心敬
二オ1 感祐 宇治―前句「山をぞめぐる川浪」によせたか。
二オ7 宗恰 大井川―前句「嵐の末にうつる山の端(嵐山)」によせたか。
二ウ7 感祐 和歌の浦―前句「うきは年なみ」に「和歌(若)」を掛けてよせたか。
二ウ12 行助 初瀬―前句「鐘」寄合。
二ウ13 宥範 立田山―前句「初瀬」同園。

- 三オ8 たつ市―「辰の市」の事とせず。
名ウ3 宗恰 比良の山―前句「浦」を琵琶湖と見立てたか。
名ウ4 土沔 大比叡―前句「比良の山」同園。
士沔1/11、行助1/7、感祐2/6、宗恰2/5、宥範1/3、
心敬0/10、宗江0/9、顕乗0/9
⑬ 「けふこずは」主導 心敬
初ウ11 世縁 音羽川―前句「滝」によせる。
三オ2 元用 住吉神―前句全体によせる。
三ウ3 専順 木幡山―よせ未詳。
三ウ12 心敬 淡路追門―前句「梶をたえ(由良の戸)」によせたか。
名オ7 心敬 (天)橋立―前句全体によせる。
心敬2/14、専順1/12、元用1/9、世縁1/6、行助0/13、
賢盛0/13
⑭ 「蟬のはの」主導 心敬
二ウ6 元説 塩籠―前句の池を河原院の庭池と見立ててのよせ。
二ウ11 専順 伏見―ここに伏(掛詞)。
二ウ12 常安 菅原―前句「伏見」同地。
三ウ14 心敬 (天)橋立―千載、五〇四、赤染衛門の歌によるよせ。
名オ11 道賢 志賀―前句「うらみ」を「浦廻」と解し、句全体の意によせる。
心敬1/14、専順1/12、元説1/10、道賢1/10、常安1/8、
行助0/12、勝元0/11
⑮ 「一年に」主導 能阿
三オ2 常安 末松山―続拾、一四〇、藤原為家の歌によるよせ。
三オ3 世縁 宇治里―よせ未詳。

- 三オ11 能阿 常盤里―訪はるべき時は(掛詞)。
三ウ1 常安 水基岡―前句「文」寄合。
名オ9 心敬 内野―前句「朝日寺」(北野)によせる。声の内(掛詞)。
名ウ5 元説 水無瀬川―前句「山本」によせる。
能阿1/17、心敬1/17、元説1/12、常安2/11、世縁1/10、
専順0/16、幸綱0/11
⑯ 「梅送る」主導 心敬
初ウ5 実中 鳥羽田―前句「秋の山」につく。
二オ4 専順 瀬田の中道―前句全体によせたか。
二オ5 元禪 逢坂の関―前句「瀬田」同園。
二オ11 心敬 比良の海―ひら(平)(掛詞)
三オ5 古江 (普通名詞扱)
三オ7 心敬 住吉―前句「松」によせる。
名オ8 心敬 袖の浦―袖の裏(掛詞)。
名ウ2 宗恰 美豆野―森を見つ(掛詞)、
心敬3/16、専順1/16、実中1/9、元禪1/9、宗恰1/9、
行助0/14、宗祇0/10
⑰ 「鳥ねふる」主導 心敬
二オ11 通賢 泊瀬―前句「遠山守」から籠る―籠江の初瀬とよせたか。
名オ7 宗祇 武蔵野―前句「ゆかり」によせる。
名オ8 賢盛 向岡―前句「武蔵野」同園。霜に向ふ(掛詞)。
賢盛1/13、宗祇1/10、通賢1/8、心敬0/13、専順0/12、
行助0/11

- ⑱ 「ころやとき」主導 心敬
二ウ3 宗祇 深草―「深い草」によせる。
二ウ9 元用 宇治川―古今、九八三、喜撰法師の歌によせる。
三ウ6 行助 待乳の山―人を持つ(掛詞)。
名オ4 量阿 象山―月に來(掛詞)。
名オ13 行助 大原―前句「草の庵」によせる。
行助2/10、量阿1/8、宗祇1/6、元用1/6、心敬0/11、
専順0/10
⑲ 「雪の折る」主導 心敬
二オ7 宗祇 白川―誰知ら(掛詞)。
三オ2 心敬 船岡―前句「塚」寄合。
三オ3 長敏 明石―前句「岡」寄合。月は明し(掛詞)。
三オ11 修茂 那須―前句「狩」によせる。
名オ7 修茂 名取川―前句「埋木」寄合。
名オ11 宗祇 小野―「都」によせる。
名ウ5 宗祇 玉津島―前句「歌」によせる。
心敬1/19、宗祇3/16、長敏1/12、修茂2/11
非力の故に考え違いもあるうし、「未詳」のままで残したのも多い。
博雅の士の御教示を得たい。
(おかもと・ひこいち 元本学文学部非常勤講師)